

令和6年度 第1回創造農村部会 開催報告

【全体概要】

- 第1回創造農村部会は3自治体が参加し、東京工業大学 環境・社会理工学院教授の真田純子氏を講師として、「都市と農村の真に幸せな関係とは」をテーマに勉強会を実施した。
- 事前準備として、部会員は真田氏の著書「風景をつくるごはんー都市と農村の真に幸せな関係とは」を読み、真田氏の講演では、部会員が興味、関心を持ったことを中心にお話いただいた。
- その後意見交換会では3つのテーマを設定し、活発な質疑応答や意見交換が行われ、最後にCCNJ 顧問の佐々木雅幸氏に総括いただいた。

開催日時	令和6(2024)年8月9日(金)9:30~11:30
開催方法	オンライン開催(ZOOM ミーティング)
主催	丹波篠山市
共催	創造都市ネットワーク日本(CCNJ)、文化庁
参加人数	18名
参加自治体・団体数	自治体:3 ※事務局除く
プログラム	<ul style="list-style-type: none">□開催挨拶<ul style="list-style-type: none">・酒井篤史氏(丹波篠山市 企画総務部 ブランド戦略課 課長)・山崎真司氏(文化庁 参事官(生活文化創造担当)付 参事官補佐)□部会員自己紹介□勉強会の趣旨説明□勉強会 テーマ:「都市と農村の真に幸せな関係とは」<ul style="list-style-type: none">・真田純子氏(東京工業大学 環境・社会理工学院教授)□意見交換会<ul style="list-style-type: none">テーマ:<ul style="list-style-type: none">①農村風景が生み出す価値②日本の風景を振り返る③これからの風景に向けて□総括<ul style="list-style-type: none">・佐々木雅幸氏(大阪市立大学名誉教授/CCNJ 顧問)□閉会挨拶<ul style="list-style-type: none">・酒井篤史氏 (丹波篠山市 企画総務部 ブランド戦略課 課長)

【勉強会概要】

1. 目的

- ・前年度に部会員に対して部会で取り上げたいテーマに関する調査を実施し、その中で関心が高かった2つのテーマ、①文化資源の更なる活用の検討をするための先進的な取組事例の勉強、②文化資源を通じて（活用して）関係人口の増加につなげるための勉強、を中心に事務局で検討を行った。
- ・講師をお願いした真田氏とも協議し、いままでと少し異なる視点から「農村の生業で作られる風景を文化資源として活用していく方法」や「効率重視の農業脱却を見据えた都市と農村の関係性の見直し」などを学ぶ機会とし、勉強会を開催した。

2. 勉強会

- ・農村に関する政策の歴史から過疎化が進んだ原因を振り返り、農村と都市の「選ばれる側」と「選ぶ側」の関係性を見直し、農業政策と農村政策の統合や、消費者の意識変化を促し、良い経済の循環を目指すべきとのお話があった。
- ・各自自治体からの質問については、環境など農産物に持続可能な経済循環を生むような新しい「価値」をアピールするようアドバイスをいただいた。

3. 意見交換会

- ・テーマ毎に意見交換が行われ、テーマ①「農村風景が生み出す価値」については、イベントはビジョンを持って何を達成するために開催するのかを明確にする必要があること、民間の協力を得る場合は、やる気が空回りしないように、その価値や意味を勉強する機会を創出することなどのアドバイスがあった。
- ・テーマ②「日本の風景を振り返る」については、単に関係人口を増やすのではなく、地域の真の価値の理解者を増やす必要があり、エコ B&B への登録なども策のひとつとして提案された。また、その「価値」が理解されるようにアピールできれば、地域の価値を消耗するような労力を掛けなくても売れるようになるとの話があった。
- ・テーマ③「これからの風景に向けて」については、自治体として分野を跨いだひとつのビジョンを示した上で、各政策を立てるための庁内の勉強会などが重要な示唆があった。また、生産者と消費者の距離の縮め方として、イタリアのスーパーにあった野菜の旬が書かれたポスターや、CO2 排出量や露地栽培かハウス栽培かなどの表記があるだけでも、消費者が農村のことを考えながら購入するきっかけになるかもしれないとの話があった。

4. 総括

／佐々木雅幸氏（大阪市立大学名誉教授／CCNJ 顧問）

- ・食文化と農業の関係性は深く、鶴岡のレストランで在来作物を使った料理を出すようになったことで、農業者が生きがいを感じるようになった事例を挙げられ、文化庁も食文化を軸にした地域文化政策を行っているとのことがあった。今日の勉強会ごはんから環境を変えようとするアプローチであり、とても刺激的であった。
- ・創造経済は大量生産・大量消費の次の段階のもので、環境を重視した柔軟な生産システムや個性的・文化的消費であり、地域の再生のチャンスなのだと改めて感じた。

